

百年史編集をかえり見て

第一代委員長 土 田 直 鎮

昭和四十九年に東京大学創立百年記念事業の一つとして東京大学百年史の編纂、刊行が企画され、百年史編集委員会及び百年史編集室がスタートを切ってから十年の後、昭和五十九年三月に「通史一」「資料一」が刊行された。私は昭和五十二年四月に、教養学部部の笠原一男教授が停年退官された後を受けて編集委員会委員長並びに編集室長となつたが、六年後の昭和五十八年四月に、思いもかけず千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館に転出することになり、後を教育学部寺崎昌男教授にお願いしたのである。

従つて「通史一」の納品時には東京大学を離れていたわけであるが、しかしその時は誠に感慨無量なものがあつた。そして引続き通史・資料の二、三が刊行され、部局史一も完成している。編集委員会は百年史全体を統括し、編集室はその基幹となる全学の通史・資料の編集・刊行に当るといふ組織であるが、編集室に関してはその刊行の任務はこれを果し得たわけであり、今さらながら担当者各位の努力に深甚の謝意を表すると共に、その内容についても、はばかりながら大き

な自信を持っていると申し上げたい。

以上は堅苦しい御挨拶であるが、以下は少し気楽に思いつくままを並べることしよう。

実は私が室長になつた時は、一体、本当に百年史が出来るのだろうか、正直の所、全く見当が付かなかつた。東京大学自体が、かつて大久保利謙先生が事実上ほとんど独力で「東京帝国大学五十年史」を作り上げられたほかは、この種の仕事に関して経験も蓄積も持っていなかつたし、経費面でも募金の利子でまかなうというたてまえで裏付けは何もない。その上、百年記念事業反対という一部学生たちの動きも活発で、しばしば抗議騒動があり、神田学士会館での百年記念式典も、多数の本部職員が立番として集合していたようなわけで、とても平穩な空気の中の話ではなかつた。百年史の編集などは、企業募金と違つて学術的な仕事であるから、さすがに真正面から攻撃はされなかつたが、作業の安全はもとより、資料の保管の為にも、百年史編集室の小さい入口に嚴重な鉄扉が取り付けられ、出入後には必ず施錠する

習慣となった。この習慣は事態が全く平静化した今日でも続いているが、これは資料の保全の為に喜ぶべきことである。

しかしとにかく、これは学術としての仕事であると覚悟をきめ、目次案を作成したり、資料の収集整理を進め、五十年史の勉強をしたりしている中に、室員の顔ぶれ（ほとんどが非常勤であるが）も次第に多数多彩になり、執筆分担もきまるといふ次第になった。ただし、分担がきまるといふことは、それからその課題についての研究が始まるということなのであるから、実際の執筆などははるか先にならざるを得ない。私は数年間には諸会議の席上、百年史の進捗状況を報告するに当って、近代の高等教育史、学術史の分野は未開拓であるので、目下若手の優秀な研究者を編集室で養成中であり、追ってその成果は期して待つべきものがある、と繰返していたようである。これは単なる口実ではなく、執筆者たちは多くは近代史あるいは教育史の大学院クラスの俊秀であり、出身大学もまちまちであるが寺崎・伊藤（隆）両教授の統率下に実に仲良く協同して励んでくれているのを見て自信を持っていったからである。また一方、百年記念事業の諸企画の中で、実際に活動しているのは百年史だけではないかという自負もあった。

それ以後の細かいことは省略するとして、なかなか執筆に踏み切れない執筆者に対して試験的な執筆をすすめて見たり、体裁統一の工夫をしたりしている中に次第に軌道に乗り、昭和五十六年・七年はいよいよ正式な執筆原稿の作成に油が乗って来た。そして毎月の室会議で厳しく原稿を集めたのは伊藤教授であり、これらの原稿をタイプ化した上で大幅な手入れ、調整を行ったことは大成功であった。その間

に、最初の頃は全く見当も付かなかった部局史の編集も活発になって来たのも嬉しいことである。

通史・資料が完成し、部局史もゴール目指して進行中の今日、この事業に関係して表方・裏方それぞれに尽力された方々に、一一その名は挙げないけれども心から御礼を申し上げたい。そして百年史編集室について言えば、皆本当によくやった、の一言に尽きる。

さて、問題はこれからである。百年史編集の仕事の基礎はもちろん各種の史料であるが、我々が初めから痛感したのは、さきの五十年史の時に収集利用された史料の中、多くのものがすでに散逸していること、東京大学内では、大学関係史料の組織的な保存・蓄積が全く見られないことであった。これでは困る、ということから、百年記念の学術研究奨励資金による学内共同研究として、「東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究」なる課題で申請し、幸いに認められて昭和五十六・七年度に研究調査を実施してその報告をまとめたのである。その結果、果して東京大学の場合、学内文書の多くは未整理であり、系統的な収集・保存は行われておらず、従って事務部門が現に使用中のものとはともかく、非現用文書の消滅・散逸は防ぎ難いこと、現に収集した百年史関係の貴重な史料の保存についても何等頼むべき保証はないこと、が明らかになった。そこで我々としては、国外諸大学ではその設置がほとんど常識化していると思われる大学図書館（アーカイヴズ）の設立を提言して報告書に加えたのである。

その後、この問題については百年史編集室から平野・森岡総長に提案があり、その措置につき進行中の由であり、私も個人的に森岡総長に

お願いしたこともある。

具体的なことには触れないけれども、日本の近現代における大学、特に東京大学の存在の意義を考えるならば、東京大学に関してこれまで残された史料を収集・整理し、さらに今後も系統的に史料を保存・整理の上活用して行くことは、東京大学が学術上果すべき義務であると言つてよい。もし幸いにしてその実行機関が誕生するならば、献身的にその任に当るべき人材は、百年史編集の間に育成されたと私は考えている。

百年史編集室とわたくし

第三代委員長 寺崎昌男

東京大学百年史に関係をもつようになったのは、教育学部元教授、故・仲新先生のご紹介と推挽によるものだった。昭和五十年九月、立教大学文学部に勤めはじめた二年目のことである。この年九月二十九日の手帳に、「学士会議本郷分館 東大編集委員会」と書き込んでいる。いまにして思えば、わたくしたちが「大委員会」と称している全学の「東京大学百年史編集委員会」のことであり、記録をみると、この時が第六回目の集まりであった。

委員長の笠原一男先生の主宰で、当時はまだ顔も知らない各学部の委員の方達が集っておられた。わずかに大久保利謙先生や渡辺正雄先生（科学史）などの編集委員会委員や伊藤隆・益田宗の旧知の両専門委員（当時助教授）の顔だけが分った。護雅夫・稲垣栄三の両副委員長は、ようやくお顔がわかる、という程度のおつき合ひであった。会議では、二年間は史料収集にあて、その後二年間で原稿を完成する、ということが語られていた。私学のくつろいだ雰囲気の会議に馴れていたわたくしは、厳肅な、というよりむしろ固い雰囲気に戸惑いながら、半ば他人事ひとごとのような気持でこうした話を聞いていた。

「学外専門委員」として編集室に出入りする期間が暫く続いた。仲

先生は、編集室運営についての意見の違いから、翌五十一年三月末で主任格だった編集室を去られ、編集委員会の委員になられた。五十二年四月には、笠原先生の御停年の後をうけて土田先生が委員長兼室長の役を引きうけられ、その六年後の五十八年四月からは、その役が自分に回ってきてしまった。この間、五十四年三月から、わたくしは東大教育学部に移ってきていて、百年史の仕事はもはや他人事とはいえないものになっていた。「事務局長的委員長」に徹します、と表明(?)して、稲垣副委員長、伊藤・益田の両新副委員長とご一緒に最後の役回りを引きうける覚悟をした。翌五十九年春には『通史一』『資料一』の刊行を見、その後六十一年春の『通史三』『資料三』の刊行まで、わたくしは、編集室が責任をもつ全六巻の刊行の「音頭とり」をやらせていただいたわけである。

委員長・室長になってからの感懐を語るには早過ぎる。益田副委員長のもとで、部局史刊行についてまだまだ胸突き八丁の努力が続けられているし、委員長・室長としての任期もいくばくか残されているからである。むしろ百年史執筆作業が開始される前の、笠原委員長、土田委員長時代の思い出を記したい。

第一の思い出は、史料集めや聴き取りのことである。伊藤隆専門委員（のち副委員長）や大久保先生を中心に、昭和五十一年度から五十四、五年度にあたりにかけて、精力的な作業が進められた。稲垣副委員長紹介による数百点を教える内田祥三元総長の家文書をはじめ多くの文書の受託、石井勲氏をはじめとする事務局長の歴訪等々の作業に、はじめ学外者として、五十四年度からは教育学部教官として参加するなかで、わたくしは国史学畑の近・現代史研究の「足腰の強さ」というものに気付かされ、大きな刺激をうけた。いづれかといえれば手持ちの史料だけを使ってわかったようなことを書いてしまう教育史の傾向に、反省を迫られることも度々であった。

第二の思い出は、創立記念式典のためのアルバム編さんの仕事である。笠原委員長時代の五十一年初夏に、創立記念式典の委員長をしておられた故・安藤良雄先生から話があり、編集室として協力は惜しまない、ということになったのだが、具体的な仕事は、結局わたくしに回ってきた。思えば学外専門委員などというお上品な立場にいたわたくしに、はじめて回ってきた力仕事だったといえるであろう。いま放送教育開発センターの助教授をやっている館昭氏（当時・教育学研究科大学院生）をアルバイト助手に引きこんで、五十一年の六月ごろから翌年一月まで半年強の短期間に、夏休みもつぶしてどうにかやり上げるのが出来た。最後には自らホテルに閉じこもって書いた巻末の「東京大学小史」は、とくに思い出が深い。写真や図版集めの苦労を背負い込んだ館氏と、今でも飲むとアルバムの思い出を話し合う。

第三は、目次の素案づくりのことである。

「えー、目次をつくらなければなりません、寺崎さんひとつ原案をつくってくださいませんか」。五十二年四月、土田委員長下に開かれた初回の編集室会議での発言だった。とりあえず戦時下までの案をつくって、何回も討議してもらった。立教大学の初等教育（小学校）実習のさなかだったから、品川のある実習校の校長先生の机を借りて第一次案を作り上げ、弥永（現小川）千代子氏に速達使で投函したことなど、忘れられない。なお目次案の昭和期と戦後の部分については、後に伊藤専門委員を中心とする国史関係の編集室員諸兄によって改めて作り直され、先に出来た明治・大正期のものと両々あいまって通史編全体の骨格ができていった。

いよいよ通史編と資料編が刊行の段階に入ってから辛労は、まだ筆端にのぼすのもためらいたい位の生ま生ましさである。

「試験原稿」と称した素稿の改訂の作業と、資料編に収めるべき資料の確定、それに私自身の担当分や修訂稿の執筆等が、三年間息もつけぬ思いで続いた。すでに土田委員長時代から編集室員や執筆委員に対し「試験原稿」の苛斂誅求役を買って出たのは、伊藤専門委員であった。それらを印刷したいわゆるタイプ原稿の山に手を加え、書き足し、削る仕事が残されていた。資料の選定も、大仕事だった。

もっとも、改訂作業や史料収集についてはほんとうに「息もつけぬ」思いだったのは、昭和五十年の発足当初から専任者を勤めた酒井豊氏（現・青山学院大学助教）と、彼の後を継いで、昭和五十六年以降助手になった中野実氏の二人であろう。酒井氏は資料編一、二の基礎

資料の収集、中野氏は通史編一、二、三巻を通じての改訂作業と資料編全体の編成に、力をふり絞ってくれた。さらに、中野氏を援けて改訂作業に当たった照沼康孝氏（現・文部省教科書調査官）、黙々と改訂基礎原稿の清書とチェックに当たってくれた田辺久子女史の努力は、末期の三年間を支える最重要な柱だったといつてよい。

これまでの一〇年間を振り返ってみて、いくつかの忘るべからざる事柄がある。今後、沿革年史が刊行される際の参考にもなろうと思うので、思い出を兼ねて記しておきたい。

一つは、資料の収集や閲覧・利用について、編集室が大幅な自由を享受したことである。これは、主として本部事務局や各学部事務局等の理解、元総長御遺族等の文書寄託者の寛容、附属図書館の協力に負うところが大きい。各学部の内規や教授会記録等の部外教授の資料については、もちろん編集室は披見を慎しんだが、それ以外の記録については、望み得る最高度の閲覧の自由、記述の自由を享受した。聞くところによると、諸大学の年史編さんに当って、評議会記録すら閲覧を拒まれたり、あるいは二、三人の執筆者が漸く閲覧をしたあと、成稿後は全面的に閲覧禁止に附されたりする例があるという。履歴記録についても過度の秘匿措置が取られることが少なくない。

このような例に比べると、東京大学百年史は、幸せであった。全編を通読すれば分る通り、評議会や学内記録、元総長のメモ等々は通史全巻を通じて記述の底に踏まえられており、時には直接の引用もなされている。また、附属図書館所蔵の「東京大学五十年史料」の文書群も、わがものの如くに駆使することができた。これらの点に何等の

外部的制約を加えられなかったことに対し、編集室長として、最大限の謝意を表せざるを得ない。

第二に、右のような「自由」にも支えられて、百年史編さん事業を、事務的作業としてではなく、学術的事業として発想し、遂行し得ることができた点である。笠原・土田両委員長とも、編さん事業を単なる顕賞作業や庶務的事業としては考えられなかった。この姿勢は編集室全体において受け継がれたと考える。助手はじめ編集室員全員が、研究的姿勢で素稿を書き、史料に当った。

もちろん「作品としての沿革史」は、直ちに学術論文、学術書ではないし、またあり得ない。だが、少くともそれを作成する基礎作業は研究的なものであるべきであり、また、「作品」そのものも、最大限の努力をもって学術的なものに近づかねばならない。それは学術・文化機関としての「大学」の責務でさえあると思う。

このような意味で、前記の条件に支えられて、編集室では能う限りの努力をしたし、また努力することができた。一例だが、東京大学成立前の「大学校」や医学校についての論究、帝国大学制度の形成、東京大学卒業生の進路分析、戦時下の大学自治諸事件の記述等々の部分に、そのような努力の跡が刻まれている、というのは、必ずしも自画自讃には当るまい。

第三に、執筆、編集を支える人的条件についての、前二委員長の識見を記しておかなければならない。すでに笠原委員長時代から、たとえば学外者としてのわたくしを招かれるという雅量を示されたことにあらわれるように、「開かれた」体制がとられていた。土田委員長

時代から編集室員も増加したが、その採用にあたっては、出身学校、学部系列等にこだわらぬ方針を、むしろ自覚的にとってゆかれた。

「史料編さん所の方式にならったままですよ」と土田先生は言われたが、適材適所主義、超学閥方式ともいべき編集室の人員構成がとられた。出身大学をみても、東京大学はもろんのこととして、立教大学、慶応義塾大学、東京女子大学、都立大学、早稲田大学、執筆員を入れば北海道大学も含む多彩な出身大学をもつ編集・執筆員がそれぞれの何等かの形で通史・資料編に参加した。また、専門分野についても日本史と教育史の双方にまたがっている。「しっかりやってくれる人に頼む」というシンプルかつ明快な方針が、百年史通史編と資料編を支えたといつてよい。「東大の国史出身者だけ」とか、「教育史畑の人間だけ」などという狭量な運営でなされていたとすれば、この全六巻はいまのような形にはならなかつただろう。出身校と専攻を異にする若い人達が、この機を除いては滅多に考えられないような協業の実をあげ、素稿を書き、史料を収集してくれた。狭い同窓意識や閉鎖的体制が沿革史を害う例が少くないことを思えば、笠原委員長の雅量や土田委員長の英断をわたくしは改めて讃え、かつ感謝したい。

室長としての謝辞として忘れてはならないのは、編集室の事務的管理の責任を負われた本部事務局とりわけ広報企画課へのそれである。編集室の研究室的性格と、広報企画課の負う事務管理上の責任とは時に矛盾し齟齬することもあった。しかし、同課の後援がなければ編集・刊行の作業を進めることはできなかった。最終的には教官の意見を尊重するという姿勢をもって、同課はわたくしたちの仕事を支えてく

れた。小林靖之、山本信一、小口一元、飯盛誠一郎の歴代課長、およびそのスタッフの方々、編集室草創期以来陰に陽に情報・資料の提供をされた清水洋美・現庶務課課長補佐などに心から御礼を申さなければならぬ。その他、会計記録の利用の便をはかり、教職員一覧のためのカード作成の便宜をはかれた経理部や人事課の方々への謝意も、逸することができない。このように考えてくると、編集室の仕事というのは、やはり全学に支えられた事業だったと痛感される。わたくしとしては、今後、この一〇年間の仕事の基盤となった史料が、どのように保存活用されるかについて、最大の関心をもって六十年の深秋を迎えようとしているところである。

百年史編纂の思い出

十年以上に亘る編纂が終わったらどんなにか感激の大きいことであろう、と思っていたにもかかわらず、私自身の直接の責任範囲であった「通史」「資料」各三冊が出終わった時、やっと終わったかと思っただものの、予想したような感激はなかった。そして毎日の仕事に追われて、急速に今その編纂の時の色々の行き詰まりやその打開のための考案などについて、更にはその編纂の過程自体についても記憶が薄れていくのを覚える。そこでなるべく記憶を思い起こし、記録しておくべきことをこの機会に書いて置こう。

私は専門委員、編集委員、編集委員会副委員長として、この編纂計画が、例の紛争で中断し、そして再開されて以後、昭和五十年頃からこの編纂に関わって来た。当初会議ばかりで、しかも紛争がまだくすぶっていたような状態の中で、本として完成した形を想像することも出来なかった。史料を集め始め、数年たった段階でも、完成させ得るという確信はなかった。漸く出来るという確信を持つ事が出来たのは、昭和五十二年に土田委員長が就任した頃からであった。

確信を持たない事にはいくつかの理由がある。一つは、この編纂は『五十年史』と異なって、若い研究者を集めて分担執筆し、それ

副委員長 伊藤 隆

を纏めて行くという方式を採ったのであるが（この事自体どういう経緯でどうしてそうなったのか今正確な記憶がないが、これは重要な決定であったと思う。そしてこの東京大学百年史の通史のそれは特色と云って良いであろう）、そのメンバーが揃い、或る程度訓練された事、そして彼等を含めた編集室が好い雰囲気になれた事である。チームで仕事をする場合なんと言っても大切なのは、目的に向かって気持が一致することだからである。もう一つは、まだまだ不足であったが、相当地度史料を集めることが出来たということである。大学自体が持っていた史料の中でも、とりわけ戦時期を中心とした部分が紛争の過程で失われていた事が大きな痛手であったが、その期間に評議員、学部長、総長であった内田祥三関係文書を得られた事が、その欠を補うものとなった。

ごく初期、昭和五十年七月に私が当時の笠原委員長に出した意見書のコピーが私のファイルに綴じ込んであるのを先日見つけた。そこで私は第一に積極的にPRする事（広報の利用、ニュースの発行、展覧会の開催―これは元々大久保先生の提案であった―等）、第二に大学関係者の史料の発掘とヒアリングを積極的に行う事、第三に人材を集

める努力をする事、第四に「計画書」をペーパープランでも良いから作成する事、第五に編集室の体制をはっきりさせる、つまり仕事の内容をきちんと決める事、を提案している。この内第一のものはやがて『東京大学史紀要』として実現され(同年9月にやはり「ニュースの発行について(案)」を書いており、これも私のファイルに綴じ込まれていた。内容的には後の『紀要』である)、また展示会も開かれ、学内広報に「東大百年史編集室通信」が翌年から連載されるようになっている。第二の点も積極的に取り組まれ、現在まで継続して、大学の重要な財産になっている。特に重要なのは第三の人材の点である。

「執筆者、協力者」を主として大学院学生、助手クラスから集め、史料蒐集や元原稿の執筆などの作業を通じて研究者を育てて行くということがその狙いであった。そのためにその成果を発表する事を奨励するというものであった。実際百年史通史の完成に大きな役割を果たしたのは、彼等であった。そして現在彼等は若い研究者として各方面で活躍しているのである。これは百年史編纂の誇って良いことと思つている。

第四の中には益田氏の提案の研究会を組織するのも良い方法だと書いている。これは外部に広げることが出来なかったが、実際に行われ、室員同士の知識を深め、また意思を纏めて行くという重要な役割を果たしたように思う。特に「評議会議事要旨」を皆で分担して読み、その議題の目録を作り、報告するという場合は成果が大きかった。

そして五十二年に土田教授が室長となった頃から、ぼつぼつと目次

の編成という事が可能な状態となった。これもかなり試行錯誤の結果最初の部分の目次細目が概ね固まったのが五十三年に入つてであった(時期的に後の部分は更に数年を要した)。そしてこれに従つて「試験執筆」と称して、室員を中心に小項目を分担して仮に執筆してみようということにした。これが結局は完成原稿の基になった。実際に書いてみたら、項を二つに分けた方が良いとか、二つの項を一つにした方が良いとか、此の項は別の章に移した方がよいとかという問題が絶えず起こったが、少しずつ原稿が提出され始めたのが、五十四年の後半に入つてからであった。以後その連続であったが、当初の予定よりかなり遅れた。実際の執筆にかかってみると史料が著しく欠如しているとか、事実の確認や評価について疑問が生じるといったことが主たる原因であったと言つて良いであらう。

出来上がった各項の原稿を次々とタイプ稿にし、それを検討し統一する仕事もかなり手間を要した。結構個性的過ぎる原稿も少なくなかったからである。それにやはり欠落している項目も発見され、急いでそれを書き足すという事態も生じた。こうして第一巻の原稿を入稿し得たのが、五十八年に入つてからであった。そしてこの時やつと出来上がるという安心感が生まれた。後は当初の計画の二巻から三巻編成への変更が行われたが、作業手順としては同じであった。

そしてこの頃から、百年史が完成した後、ここに集積した史料をどうするかという事が現実の問題となった。既に本紀要前号に記した目録の作成されたものだけでなく、かなりの東大関係者の個人文書のみならず、各方面から寄贈された各種史料、我々が公文書館等から蒐集

した史料等が集積されている。これを百年史編集後散逸させてはならない、というのが室員一同の強い希望であった。我々は五十年史編纂時の史料保存が必ずしも完全でなかったことに鑑み、何の手も打たなければ或いは同じ事態が生じると思い、また更に蒐集した史料が仮に保存されるとしても、それが死蔵されることになっては、日本の近代に重要な役割を果たした東大の中心とする高等教育史、延いては広く文化史の研究者等から非難されることになるだろう事を恐れた。我々が中心になって昭和56～57年度の学内共同研究として大学文書の保存について各国の例を調査し、東大として如何にすべきかを報告したのも、それに対するものであった。そしてその後も様々な働き掛けを行い、最近に至って「東京大学史料の保存に関する委員会」が発足するに至った（この経緯については前号及び本号別稿を参照されたい）。ここで本格的な対策が立てられることを強く希望したい。

史料の蒐集については思い出が多い。東京大学の建物によく似た内田祥三邸に伺って、ほこり塗れになって、史料を整理し、戦時中の大学習関係の個人記録を見つけた時の感激は忘れられない。加藤弘之文書を見せて頂くため大久保先生のお供をして加藤家を訪問したり、明治期の卒業証書を御借りするために兵庫の山の中まで出掛けた事、寒風の中を木下利玄の大学時代のノートをコピーするために岡山県足守に行った事、福井県勝山市で平泉澄元教授のインタビュウを行い二日間正座でお話しを御聞きした事、京都大学の史料調査で古い倉庫の中でほこりで真黒になった事等々、もはやディテイルは記憶が薄れているものの、印象は今も尚鮮明である。ここに挙げたのは私が参加したも

のの中の極一部であり、多くの室員の行った、そうした調査の結果の史料やその写し、写真、聴き取りのテープ等々膨大な量が編集室に蓄積されたのであり、それらは編纂に当たって大いに利用されたが、それでもまだまだ利用されつくされていないものが多い。これらが将来どうなるかは、私だけでなく編纂に参加したものの様に心配している所である。通史・資料の刊行が終わった今これをなんとか保存し利用出来るようにするというのが、私にとっても最大の課題である。

百年史編集室に寄せる私の夢

学外委員 渡 辺 正 雄

百年史編集委員に任命されたものの、昭和五十五年三月に定年で東大教授を辞し、以後五年間、新潟大学教授として新潟市に在住した関係で、百年史編集のために私がなしたことはごく僅かであった。しかし、それとは反比例して、私は、東大百年記念事業、ことに東大百年史編集事業に大きな期待を寄せ、夢を描いてきたのである。それは、このさい、東京大学にユニヴァーシティ・アーカイヴズを創設するということである。

科学史を専攻する私が行なった研究のひとつに、今から二五年以上前に着手した日米科学文化交流史というのがあり、このために私は、明治初期の東京大学および札幌農学校に在職したお雇い米国人科学教師二〇人の生涯と活動について詳細な調査研究を行なったことがある。彼らの著作はもとより、手稿・手紙・メモ・ノート・伝記的資料などを悉皆的に調べあげて、コピーとして収集したわけであるが（調査研究の結果は拙著『お雇い米国人科学教師』講談社）、日本国内では資料があまり保存されておらず、検索もきわめて困難であったのに比して、米国では調査もしやすく、驚くほどよく資料が残ってもいたのである。これは、日米の図書館および図書館学の水準の差を示すも

のであるとともに、文献・資料というものに対する意識の違いを反映しているものであるとの感を強くした。

米国における右の調査研究にとって図書館とともに重要だったのはユニヴァーシティ・アーカイヴズである。そこには、大学の歴史に関する資料はもとより、教職員・卒業生等の活動に関するさまざまな資料がよく整理・保存されていて、研究者は容易に必要なもの（時には思いもかけなかった貴重な資料）を見つけ出して利用することができるのである。一例として、東大の初代動物学教師だったE・S・モースが、帰国後オハイオ州立大学（当時はオハイオ農工大学）に招かれて日本についての講演をしたとき、あとからその内容に関して一学生が手紙で質問したのに答えたモースの返信といったものまでが、同大学のアーカイヴズにちゃんと残っていて、私はそれを目録カードで見出し、すぐに見せてもらったことであつた（拙著『日本人と近代科学』岩波新書、五三一五六ページ参照）。

日本では、資料の意義とその保存についての意識が弱いので、例えば大学関係者とかその遺族とかが、そういったものを保存しなければならぬとはほとんど思わないであろうし、また、たといそう思ったと

しても保存してくれる機関が見当たらない。そのうちに紛失したり、天災や人災で消滅してしまうのである。

東京大学も、創立以来すでに百年を経過しながら、いまだにユニヴァーシティ・アーカイヴズをもっていないというのは、まことに情ない次第である。欧米の大いなる大学にはそれがあつたのに、日本の諸大学にはそれがなく、東京大学にすらないというのは、日本の大学の恥と言わざるをえない。明治以来、追いつき追いつくことを目途してひたすら前に向かって進むばかりで、過去を顧み、経験の蓄積を尊重することをしなかつた日本の百年の歩みが、ここにもそのまま反映しているかに思われる。

この辺で姿勢の転換が計られなければならない。まして、東京大学の場合、百年史を編むために、多くの方々の尽力と協力で貴重な文献・資料が大量に収集されてきた。これらを継承し、さらにたえず組織的に収集・整理を続けて、今後、二百年史、三百年史の編集に役立てることはもちろん、また、他所にはないこれらの文献・資料を研究者が常時活用することができるような機関が、ぜひとも今設置されなければならない。

ここ十余年間、私はそのように考えてきたわけであるが、百年史の若い編集委員とともに、昭和五十三年六月十二日、茅誠司先生のインタビューを終えての帰路にそのことを話したところ、同行の若い方々がたちまち賛同してくださった。それから間もなく、編集室では、小川千代子さんが中心になって、世界中の約五〇〇大学にアーカイヴズに関するアンケート調査を出して、多くの熱意ある回答を得たのであ

る。

そして、本学としても、百年記念事業の一環としてアーカイヴズに関する学内共同研究を行なうこととなり、昭和五十六、五十七年度の東大創立百年記念学術研究奨励資金による調査研究が百年史編集室を中心に進められた。その成果の一部は、『東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究報告書』および『同・附属資料』（いずれも昭和六十一年刊『東京大学史紀要』五号に抄録）に発表されている。私自身も、昭和五十七年六月十八日、新潟から編集室に招かれて、ユニヴァーシティ・アーカイヴズの意義と必要性についてお話する機会を与えられた。

今では、東京大学全体としても、アーカイヴズ創設への気運が動いているように見受けられる。『東京大学百年史』が完結しようとしている今日、このために収集されてきた大量の貴重な資料を前にして、東大のユニヴァーシティ・アーカイヴズをつくることこそ、『百年史』の有終の美であり、東大創立百年事業が将来に向かって遺すことのできる有意義な学術的記念碑となるのではあるまいか。その実現を切に願ってやまない次第である。